
変わった転生者、なんかな？

金髪の雑魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わった転生者、なんかな？

【Nコード】

N3747Z

【作者名】

金髪の雑魚

【あらすじ】

なんか転生できるっぽいから、便利そうな能力の『才能』を貰ったのんびりと生きていこうか？ 感想を書かれる際、返信されないことを前提で書かれてください。また、作者はこれが処女作なのでいろいろおかしい所も出てくるかもしれませんがご容赦ください。

その1（前書き）

なるべくテンプレ化しないように書くのが目標。

その1

……目が覚めたら、真っ白な空間に居た。

「これはお約束のテンプレかな？あまり期待はしないけど」

だってテンプレ過ぎてマンネリ化してるからね、こういう展開。どうせこの後神様のなキャラが出てきてちよろつと会話して適当に転生って流れでしょ？はいはい即戻るボタン押しましようねー。

「そお？ならテンプレじゃない？」

「いや、欲しい」

うん、貰えるもんは貰っとかないともったいないし。

「んで、見た目がフツーで地味で個性の欠片も無さげな君は、どんな事を神様にお願いするのかい？もちろんテンプレ的な選択もよし、奇をてらつてもよし、さあ、どうする？」

何だ最初の余計すぎてお決まりの台詞みたくなってる一言は……そんなになに容姿の変更を強いられても困るし、第一容姿はこの地味なのが気に入ってるんだ、あんまし注目されたりしないし。

「限度つてあるの？中二病全開の二次創作のテンプレだと、これでもかっつてばかりにチートを要求する描写あるじゃん？」

「流石にチートは人生イージーモードでつまらないと思うよ？いやホント。実際自分がそうだからさ、ほんっと、マジで、真剣に」

だろうなー、チートは妄想に留めておかないと絶対つまらんし、なによりチートって単語が好かん。万能すぎるのはつまらん。ちよつとくらい便利なのが一番面白そうで実用的でしょ？例えば……

「『他人を幸運にする程度の能力』の『才能』とかどうよ？」

取り敢えずは某シューティングゲームの妖怪兔の能力を言ってみる。このゲームな理由は単純に分かりやすくて一番覚えてるっただけだけど。それに自分の為の能力じゃなくて、他人の為の能力つてのがミソだよな、こーゆーの。後すぐ使える訳じゃなくて、ある程度努力（苦勞）しないとイケないように『才能』にしたの。

「おお、いいチヨイスじゃん？この調子で後2個どうよ？」

「なら……『千里先まで見通す程度の能力』と『探し物を探し当てる程度の能力』の『才能』でどう？」

ぶつちやけ最新作は覚えてないし、キャラが結構好きだったから確実に覚えてるこれがいい。小学校時代のあだ名がメガネだったのと、高校時代お年玉の入った財布を落としたのを忘れないためにも。

「いいねいいね、そのテンプレやチートの否定。攻撃系統じゃないのと『才能』なのがポイントだよなー。んじゃま、そろそろどっかの世界に行ってみよー」

「あれ、どんな世界かは教えてくれない感じ？どうでもいいけど」

「そーゆーと思ってたし、程よくノーマルモードぐらいで行こう。取り敢えず戦闘はあるかもしれないね」

「それだけ判れば十分、んじゃよろしくー」

「軽いねー、いってらー」

そして急に意識が遠のいていった。

「おまけで黒歴史はカットしたげるからー」

さんくす、と心の中で言っておいた。

その2 (前書き)

短いのは仕方ない。

その2

自分が転生したことにはつきりと自覚を持ったのは、たしか幼稚園の年長になったぐらいだったわけ？ゆつくりと前世（笑）の記憶と、神様のなキャラとの会話を思い出してった。そしたらまあ、使ってみたくなるわけだ、能力を。結果としては

『幸運にしたいと思った子が、じゃんけんに勝って劇の主役になれた』

『意識したら、ちょっとだけ遠くが見えた』

『園内に隠してもらったおもちゃの、隠してある部屋が分かった』

となった。初めて行使した割には結構な手応えやった、意外やな。もうちょい難易度高いかと思っただけど……ああ、成長のスピードとか習得率的なヤツがノーマルモードとかか。それならいいんやけど……こんなちっさい頃からあんま目立ちたくもないし、小3くらいからでいい。

それと、どんな世界に転生したかが分かった。住んでる街の名前が『海鳴市』やった。アレよアレ、リリなの、白い悪魔とかが有名な

「やからか」

この幼稚園に妙に容姿が整ってたり、歳の割りに妙に大人びてたり、特徴的なアクセサリーしてたりするのがちらほらいるのは。めんどくさいったらありゃしない、いやホント。

「ねえねえ、いつしよにあそぼー」

「ん？いーよー」

でも取り敢えず今はおともだちと一緒に遊ぶことにしよう、余計なこと考えんで済むし。よーし、頑張つてトンネル掘るぞー。

その3 (前書き)

口調が安定しないのはわざと。

その3

人生二度目……でいいのか分からんけど、小学校に入学した。私立聖祥大附属小学校って言っんやけど、ここってアレだよな？主人公とかその他キャラが通ってる小学校。めんどくさー……フツの公立とかの方がお金的にもいいと思ったんやけど、親がこの卒業生らしい。なら仕方ないわな！。

「……それじゃあ、自己紹介をしてもらいます」

ぼーっとしとつたら、いつの間にか自己紹介の時間になったっぽい。自分の前のヤツらが小学生らしい自己紹介をしていく中、見た目が転生者なのが確定的に明らかかな男子生徒の番になった。何でかつて？そりゃ銀髪に金と紅のオッドアイだよ？中二病に間違いないって。

「俺の名前は神威クリス！好きなことはスポーツだ、よろしく！」

よく通る声で教室を見渡しながらそう言った。名前ですらに確信した、絶ツツ対に中二病末期の転生者やん。しかも座る直前に見覚えのある女子生徒に笑顔で熱のこもった視線を送った。案の定主人公とツンデレとおっとりやった。関わり合いになりたくねー。

「……稲葉くん、君の番だよー？」

「あ、はい！」

あれ、もう俺の番か。考え込む癖直さんといかん……

「さーいなばです！好きなことはたからさがしです！よろしくお

ねがいします！」

精神面でまだ子供な部分を全開にして自己紹介。てかアレやね、無駄に精神年齢高いから恥ずかしい。勢いだけで乗り越えたって感じやったし。……そうそう、俺の今の名前は佐藤稲葉。稲葉とか絶対能力つながりだろ、慣れるまで地味に恥ずかしかったんやけど。でも流石に太郎とか一郎は目立つよね、普通的な意味で。やから普通の苗字に少しだけ特徴のある名前の、ある意味一番無難な名前であった、いやホント。

「高町なのはです！好きなことは友達とお話することです！よろしくお願いします！！！」

俺の隣の席やけど、主人公元気やなー。てかやっぱ何か雰囲気が違うわ、他の女子生徒と比べて。ツンデレとおっとりも雰囲気違うけど。それと俺以外の転生者も別の意味で。

「平穩に過ごしたいんやけど……」

地の口調でばやいて、帰りの号令までずーっとぼーっとしてた。まあなんとかなる、とか思ってたら絶対なんかあるんやろーけど。

その4 (前書き)

一部wikiを参考にさせていただきました。

その4

さて、小学校生活にも慣れてきたころ。学校の近所にある本屋で運命的とも言える出会いをした。

「『ダウジングの全て』……どんな本やるか？」

元々『探し物を探し当てる程度の能力』の『才能』を持つてる訳やし、読んで損は無いやろうとばかりに立ち読みを始めたんやけど -

「……これは買いやわ」

なけなしの小遣いははたいて、包んでもらった分厚いそれを抱きかかえて家に帰り、早速ゆっくりと読み始める。

『ダウジングは、神の意思、未来、罪の審判などを占う目的で利用したのが原型であると考えられている。』

『中世にはダウジングは悪魔と結び付けられ、異端審問でダウジングを用いることをやめた。』

『今日のように用いられるようになったのは、15世紀のドイツにおいて、金属を探索するのに用いたのが始まりと考えられる。』

『ベトナム戦争で地雷の探知に使われ、地雷による犠牲者が飛躍的に減少したというニュースを契機にダウジングが広く世界中に知れ渡るようになった。』

出だしの一部分を抜き出してみたけど、この時点ではいろいろと考察できる。先ず、ダウジングはおそらく誰にでも可能やという事。ダウジングに使ったロッドやペンデュラム（振り子）の反応に気付け

んかったただけで、実は成功してたつてのがホントのところやと思う。次に、悪魔と結び付けられるようになったんはマナとオドが関わってくるんじゃないかと言うこと。マナは自然に存在する魔力で、オドは自身に存在する魔力なんやけど、ダウジングはマナの種類や濃度といった『その場所とは異なつた部分や異物』をロットドやペンデユラムに通じたオドで感知してたんやと思う。ちなみに魔力は霊力や氣、妖力とかに置き換えてもいい筈。最後に、ダウジングは練習した分だけ上達するのは確実つて事。さっき言った事を纏めれば子供でも分かる結論やけどね！。

「まずはロットドとペンデユラムの調達やなー」

「稲葉ー、ご飯よー！」

「はいー！」

取り敢えず晩飯やな。

その5 (前書き)

実はD Nネームを考えるのは難しい。

その5

んで、小学2年生になった訳なんやけど、早速事件が起きた。

「私のマフラーが無くなってるの!？」

1時間目の国語の授業が始まる直前、俺の斜め前の席の主人公が悲鳴を上げた。どーやら全校朝礼で教室が誰も居ない間に盗まれたっぽい。大体犯人の想像はつくが……やるんやったらフェイクを残しとけと言いたいもんやわ。

「誰だろう……」

「ひどい……」

目茶苦茶ざわついてっけど、教室から出たヤツは誰も居ない、かつ席にはついとらんがクラスメイト全員が居る。やったらいけるか？

「……やってみっかなー」

呟いて、以前公園で拾って、いろいろ加工して愛用してる、おそろく石英であるう石のペンデュラムを取り出す。んでもって、右手のそれを順番にクラスメイトの机にかざしていく。イメージは『マフラーに残った主人公の魔力残滓』で。

「佐藤君、何やってるの？」

「宝探し」

一言だけ応えてダウジングに戻ったら、なんか皆に注目されてた。見られてる中続けるのは中々苦労したけど、ついに引っかかるヤツがおった。

「何だよ、何かあんのか？」

容疑者は朱色の髪で蒼い眼をしたイケメン、俗に言う転生者やね。ちなみに名前はクラウド・アプソリュート、流石の厨二やな。

「……別に、何でもない」

「言いたい事あるならはつきり言えよ！ぶつとばすぞ！？」

うわ、D N属性まであんのかよ……ダウジングせんけりゃよかった……

「何でもないって言ってるじゃん、後暴力反対」

と言いつつも、どうせやったら最後までやるつもりだった訳で。

「ふざけんなよこのクズやろー！！」

殴り掛かって来るのが見えてたけど、ダウジングの方に専念する。そして殴られる。いてえ。

「クラウド君落ち着いて！」

「止めなよー！」

ギャラリーが止めてくれたお陰で、D Nは息を荒くしながら羽交

い絞めにされた。絶好のチャンスやな。

「悪いな」

一言言つて、D Nのズボンを一気に下ろす。そこには予想通りと言つていいのか分からんけど、下半身に主人公のマフラーを巻いた事実が偽ることなくあった。

「キヤーーーー!!」

「取り押さえろ!!」

前者は全女子、後者は全男子の叫びやった。固まっとつたD Nは一瞬で取り押さえられて、フルボッコにされとつた。ざまあ。

「あ……佐藤君！」

「ん？」

振り返ると主人公がおつた。両隣にいたツンデレとおっとりの様子から、お礼言いに来たっぽい。

「ありがとうなの!」

「別にいいよ、これで将来の目標も決まったし」

「将来の目標？」

ツンデレが尋ねてきたから、宣言の意味も含めて言っとくか。

「俺はダウジングで探偵を目指す」

余談やけど、D Nは退学になって引越したことになる。近い未来で、他の転生者の連中に殺されたって知ることになるんやけど。

その6 (前書き)

短く簡潔にしていく。

その6

はてさて、よーやく3年生になった。周りのヤツらも段々とそわそわし始めてる。

「やっとかー……」

魔法少女リリカルなのはが、本格的に始まる。

あのマフラー盗難事件で大々的に宣言をしたお陰で、俺はダウザー探偵として皆に認識されとる。しかも主人公を助けたつてのと野郎の敵を見つけ出したつてので、めっちゃ信頼アンド信用されとる。そして応援もされてる。んで、何で他の転生者に目えつけられんかというと、俺の魔力や氣といったもんが一般人よりちよいとあるくらいやからつてのがある。後デバイスを持つとらんかったり、主人公達に殆ど関わつとらんかったのもある。でも一番の理由は、あの時のダウジングが俺の素の実力やったからつてのがある。『能力』の『才能』に頼らずにどこまでやれるか試したかつたんがああ時の考えやつたけど、結果的に転生者の目を誤魔化せたい。神様サックス。

「おはよう」

「ん、おはよー」

今挨拶してきたのも転生者（雰囲気で分かった）なんやけど、フツにクラスメイトしてる。俺は別に転生者を全員邪険にしてる訳で

もないし、たまたま転生したっただけの連中なんやから、フツーに接してれば相手もフツーに接してくれる。中には過激な連中もいるけど、そもそもその辺は主人公達にゾッコンやから先ず関わらん。結局何が言いたいかってゆーと、俺の日常は平和ってことやね。

「おはようなのー！」

「おはよ」

「おはよう」

誰かが挨拶してきた。振り返って挨拶を返す。

「ん？ああ、おはよー」

噂をすれば主人公達、近くにはテンプレ転生者の神威クリス。俺の知る限り、主人公組みに一番近いのはこのテンプレやね。3人の前では比較的雰囲気が大人数いけど、3人が見てないとこやと空気が悪いつちゅーか、3人以外をあんまし気にしとらん。ゾッコンですか分かりたくもありません。

「はーいみんなー！HR始めるわよー！」

担任が教室に来て朝のHRが始まる。始まるといえば原作やけど…
…そーいやいつからやったっけ？まああんま気にせんでいーやろ。

その7 (前書き)

つなぎだから短いのは当たり前。

その7

結論だけ言うと、すぐ原作は始まった。何でかって？家から見てたし、音がすごかったし。ちなみに現場（動物病院だっけ？）からは1キロ以上あるけど、『千里先まで見通す程度の能力』の『才能』を鍛えてたお陰で全く問題なかった。そーいえばこの前千里をキロメートル換算してみたら約3927キロメートル、つまり才能をものにできれば殆ど見えないものは無いってことになる。これすげえわ、原作で『見張りに適しているから哨戒を押し付けられた』みたいな描写やったけど、こんだけ遠くのものを見れるんやったらそりゃ安心して見張りを任せれる。

「始まったかー……」

いや、別に始まってほしくなかった訳じゃなくて。普段ダウジングをやってる身としては、ジュエルシードが引つかからないかどうか心配やとよねー。引つかかったら警察に持ってって、引つかからなきゃそれはそれでありがたい。ジュエルシードでペンデュラムを作ってみたかったけど、内包しとる魔力がでか過ぎて相性悪いやろうから諦めた。魔力無けりゃ欲しかったんやけどなー……まーいーか、あんま気にしてもゲットできる訳でもないし。

「明日警察署行ってみよーかな？」

ダウザー探偵を目指し始めて、日頃からダウジングをやっているといるるなものを見つけれ。んで拾ったそれを警察署に毎回届けてると、結構注目されて覚えられる訳よ。そんでいろんな警察関係者に宣伝、ついでに協力（才能のレベリングしか頭に無かったから打算は無かった）したりして、結果的に信頼をゲットできた。たまに協

力してほしいとかの電話がかかってくるくらい。

「じっちゃんにも顔見せに行くかー」

俺を孫みたいに甘やかす、現役バリバリの切れ者老紳士副署長に久しぶりに会いに行くついでに、警察じゃアレにどんな判断をしたのかを聞いてみよつと。原作じゃ見れなかった部分やから楽しみやわー！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3747z/>

変わった転生者、なんかな？

2011年12月15日00時54分発行